

神と富を秤にのせて

ルカによる福音書 16 章の、この「不正な管理人の譬え話」には驚かされます。飲み込みにくいというか、清廉潔白なイエスさまのイメージのあるわたしたちには「不正にまみれた富で友人を作りなさい」という言葉をどう受け止めたらよいか、そこでフリーズしてしまうようなところがあります。簡単にいえば躓くわけです。福音の与える躓きは様々ですし、イエスさまご自身が、わたしに躓かない者は幸いである、というお言葉を残しておられます。しかしその多くは理不尽なほどに大きな神の恵みや、赦しの途方もなさに、わたしたちが躓くのであって、この不正な管理人の譬えにあるような、「不正」とはっきり名指しされている人物を登場させて業務上の背任に当たるやり口を主人にほめさせ、不正にまみれた富で友人を作りなさい、とつなげるのは福音の与える躓きとは別の躓きを与えるように瞬間、思えてしまうのです。そんなことってあるのでしょうか。そういう意味では難易度の高い譬えというか、聞き方を間違えてはいけない譬え話です。今週は、解釈に苦しみながらもんもんとして過ごしましたが、少しずつ霧が晴れるようにかたちが見えてきたような気がします。このルカによる福音書にしか載っていない「不正な管理人」の譬え話は、同じく、この福音書にしかない 15 章のみつつの譬え話と呼応する、そのように読むことでメッセージが浮かび上がるのではないかと示されました。そして、今日は教会暦の終末主日、一年の終わりの聖日なのですが、その日にこの箇所が与えられているのも巧まざるめぐり合わせだと今は思わされてます。

さて、この譬え話は「それからイエスは弟子たちにも語られた」と始まります。「弟子たちにも」と書かれているのは、今言いましたように、この前に語られた 15 章の 3 つの譬え「いなくなった羊」「なくした銀貨」「放蕩息子」という有名な、慰めに満ちた、万人に受けとめ

られやすい譬え、これを主イエスはファリサイ派や律法学者たちが、イエス様が罪人や律法学者たちと一緒に食事をしていることを見咎められた時に話された。悔い改めるひとりの罪人のために天に大きな喜びがあるのだと話された。さらに、放蕩息子の兄の立場にファリサイ派や律法学者たちをおいて、彼らをも父の執り成しと招きのもとにあることを明らかにされました。その上で、今度は、弟子たちに向かって、この不正な管理人の譬えを話された、ということです。こちらの譬え話は今度は向きを変えてクローズドサークルというか、内輪の弟子集団に向かって話された譬え話であることをまず理解しておきましょう。つまり、主の弟子となって生きることを志しているわたしたちに向けて語られたのです。

この「不正な管理人」の譬え話ですが、今回は久しぶりに新共同訳聖書の小見出しの是非を思わされました。口語訳聖書の中にはこういうものはなかったのですが、新共同訳聖書からエピソードごとに、ここで切れるだろうという箇所をわけて、その段落ごとに内容をあらわす小見出しをつけています。「放蕩息子」の譬えとか、今日の箇所でいえば「不正な管理人」の譬えとつけるのです。すると、わたしたちは先入観というか、この話に出てくる管理人は不正を行う人間だと思って読み始めます。しかし、この管理人はいつから不正を始めていますか？どこから悪事に手を染めたと思いますか。わたしは不正な管理人というタイトルのせいで、最初から不正に手を染めて主人の財産を無駄遣いしていたと想像していたのですが、本当にそうでしょうか。あらためて読んでみます。「ある金持ちにひとりの管理人がいた。この男が主人の財産を無駄遣いしていると、告げ口をする者があった」。面白いのはここで「無駄使い」と訳された言葉が15章の放蕩息子の譬え話のなかにも「遠い外国へ行って、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄遣いしてしまった。何もかも使い果たした時」とある言葉と同じなのです。新約聖

書で9回しか使われない動詞でルカ福音書に3回出てきます。無駄遣いという同じ主題で「放蕩息子」と「不正な管理人」はリンクしています。もとの意味は「散らす」という使われ方で財産を散らしてしまったということです。ただ放蕩息子の方は外国に行って「飲む・打つ・買う」という「散らし方」をしてすってんてんになるわけですが、管理人の場合はこのあと出てくるように主人の財産をあちこちに散らした＝つまり貸し付けたり、投資したりした。それは彼の職務に関する働きの一環ですね。そしてこの手の投資は、うまくいったりいかなかったりするものですし、結果が出るのに時間も必要です。しかし、このように主人の財産＝金を散らした結果を「無駄遣いしていると告げ口する者があった」とイエスさまは話されました。「告げ口」ですから、良いように言わなかったと考えられます。それで主人は管理人を呼びつけて「お前について聞いていることがあるがどうなのか、会計報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない」というのです。これは告げ口を受けて、管理人の弁明を聞く前に、もうクビを宣告していませんか。わたしは、この譬え話において、管理人はこの主人からの一方的なクビを申し渡されるまでは不正はしていないと思うのです。クビだと言われて、債権者を呼び出して書類の偽造を始める。これは自分を守るためにするわけですね。そして、もうひとつこの譬え話を理解する場合に重要な情報があります。「ある金持ちに1人の管理人がいた」という状況ですが、この金持ちは15章に出てくる放蕩息子の父親と同じではありません。これをイコールと読んでしまうから間違えるのです。むしろこの金持ちはルカが12章で「愚かな金持ち」を登場させているように、またこのあと「金持ちとラザロ」という強烈な話をしますように、古代社会では金持ちは不正を働いた人とみなされていたのです。これは社会の生産力や技術力が弱くて余剰生産物というようなものが極端に少ない社会においては人よりも多く所有する

ことは本来多くの人の手において生かすはずのものを奪い取っているという理解なのです。先日、NHKでやっていましたが、わたしたち日本人が冷蔵庫で腐らせたり、コンビニや、食堂、レストランで、あるいはデパートの食品売り場で廃棄処分をしているいわゆるフードロスですね。こういう先進国のフードロスをなくさなければ地球規模の不均衡、飢餓状態というのはますます進み、すぐに取り返しがつかなくなるという報告がされてきました。SDGs＝持続可能な開発目標ということが言われるようになったのも未来の世代の分を食い尽くしてはならないということでしょう。金持ちというのは古代社会においてはまさしくそのような存在だったのです。ですから金持ちの存在自体がこの譬えを聞いている人たちの常識では不正であるとすれば、その金持ちの財産管理を任されていた男が告げ口によって弁明も許されず、一方的に解雇されそうになった段階で債権者を呼び、書類の偽造をして、自分の身を立つように恩を売ったわけです。8節に「主人はこの不正な管理人の抜け目のないやりかたを褒めた」とあり、ここで「不正」という言葉が管理人に贈られるわけですが、ここはふつう怒る場面だと思いませんか。それを褒めたということはこの金持ち自身がそういうやり方を身につけていて、のし上がってきたということでしょう。「お前やるじゃないか」、あるいは「そちも悪じゃのう」という感じでしょうか。管理人も不正に引き込まれてしまったとも読めるのです。このように整理しますと、弟子たちに、この譬えを話されたイエスさまの真意が見えてくるのではないのでしょうか。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らより賢く振る舞っていると、この譬えを話してまず言われました。そして不正にまみれた富で友人を作りなさいという、およそわたしたちが考えるイエスさまが語りそうにないススメは、この比較のために、あえて反語的に持ち出されたのであり、イエスさまは不義・不正を弟子たちに勧めているものではありません。そうではなくて、こ

の世の子たちが金に仕えるために、ずる賢く立ち回っている様子を、弟子たちよ見たか、あなたたちはそれよりもさらにまさった神の富、福音を託されているのだが、彼らほどに懸命に仕えているか。ファリサイ派や律法学者たちが鵜の目鷹の目で重箱をつつくように攻撃してくるような熱心さで、神に祈り、神に求め、神のための働きに仕えているか。お金に仕えることと神の福音に仕えることを秤にかければ、どちらが大事であり、どちらが小事であるかはイエスさまにおいては明らかです。それを忠実さの問題として、今度は弟子たちに向かって問われたのです。15章の譬えはファリサイ派と律法学者たち、つまり、この世の子らを見据えて、そして16章の譬えは光の子ら、つまり弟子たちを見据えて語られています。4つの譬えは連続していますが、とくに今回わたしは「放蕩息子」と「不正な管理人」のふたつの譬え話が写真のネガとポジのように思われました。ともにこれは資格の話として見えてこないか。もう息子と呼ばれる資格はありませんと告白した放蕩息子、解雇されそうになって管理人の資格喪失を免れるために必死になった管理人、わたしたち弟子の資格はなんでしょうか。なりふりかまわない管理人のやり方に対して、小事に忠実なものは大事にも忠実だとイエスさまは続けます。11節「不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか」という結論へと導くためのレトリック、ドキッとするような反語的な表現で弟子たちに檄を飛ばしたように思えてなりません。あなたはどのように福音に、救いの喜びに仕えているか、そのように主は問いかけ、わたしたちを主のみ業へと招かれるのです。

最初に申し上げたように今日は教会暦の終末主日、収穫感謝日、一年の終わり、神のみ前に実りを携えて立つ日です。わたしたちはみな神さまから豊かに賜物、財産を貸し与えられ、それを散らし、管理を託されている存在です。主から一人ひとりに与えられる賜物

に大小はありませんし、若い頃は出来たけれども今はもう、ということもありません。世代ごとの課題があり、とりなしの祈り、働きがあるはずです。神さまから貸し与えられた命としての時間の限り、今日という一日に、目の前に与えられている小事に忠実でありたいと願います。

お祈りいたします。